

豊間根 荒川

Toyomane / Arakawa

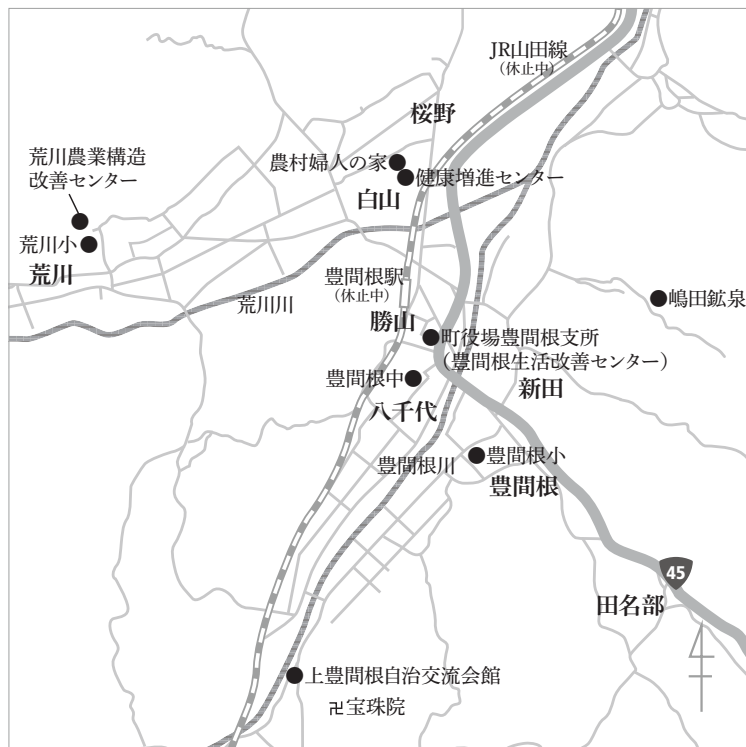
7 *chapter 7*

荒川農業構造改善センターで被災町民の
ためにおにぎりを作る女性たち
(3月26日午後1時23分撮影)
家の光協会写真部提供



豊間根・荒川

豊間根・荒川地区は、中心部の山田地区から北西に7キロメートルほど離れた山間に広がるのどかな田園地帯。内陸のため津波の被害がなく、山田地区で火災に追われて逃げ場を失った町民らが豊間根中学校などの避難所に押し寄せた。町の窮状を目の当たりにした地区の自治会や婦人会のメンバーが立ち上がり、豊間根生活改善センターや荒川農業構造改善センターなど8カ所を拠点に、即座におにぎりの炊き出しを開始。停電の中、発電機で精米機を動かしたり、交代で人員を配置したりして、農繁期を目にした1カ月間にわたる毎日、町内の各避難所に食事を配り続けた。



※地区名・施設名などは手記中に登場するものです。

死者・行方不明者	22人 [※]
震災前の人口	3,047人
一部損壊家屋	7戸
被災家屋の割合	0.5%

※他地区で被災

豊間根中学校3年 福士広大

あの日から僕の人生は変わった。その日は掃除が終わり、帰る準備をしていた。その時、大きく学校が揺れた。今までにないくらい大きな長い地震だった。防災無線で大津波警報が発表された。さすがにここまでは来ないだろうと思ったが、父が心配だった。父は仕事で石巻にいた。海の近くで仕事をしていた。母や兄は仕事が休みだったので家にいた。姉は大槌で仕事をしていたが、海にそれほど近くないので、仕事場の人たちと一緒に避難していると思い、心配していなかった。心配だったのは父一人だった。

家に帰ると家族は外にいた。そこには父の姿があった。その日はたまたま休みだったらしく家に帰ってきていた。僕はほっとした。これでもう大丈夫。家族みんな無事だったと安心していった。姉はさすがに帰ってくることはできないだろうから、2、3日くらいしてから戻ってくると思っていた。

次の日、父と一緒に父の実家の大沢に行った。信じられない光景がそこにはあった。美しい町が消えていた。建物が破壊され、町は跡形もなくなっていた。あまりにもひどい情景だった。父の実家もなくなっていた。声が出なかった。その足で姉を迎えに行った。大槌は想像以上に被害

がすごかった。ここまでは来ないだろうと思っていた姉の仕事場まで津波は襲い、仕事場は消えていた。避難所にいるだろうと思い、それから、すべての避難所を回った。が、姉はどこにもいなかった。

仕事場の人はいたが、姉だけがいなかった。何回も何回も避難所を回ったが、見つからなかった。家族みんなで探したが、見つからなかった。何度も何度も仕事場の跡地に行って探し、手がかりになるものはないか探した。探しても、探しても見つからなかった。絶望の中に家族全員がいた。

数日後に学校へ行った。クラスのみんなは無事だった。みんなの親、きょうだいも無事だった。僕は姉のことを考えると、つらくて、つらくてたまらなかった。大好きな姉。僕の理解者だった姉。学校にいても思い出し、泣き出しそうになったことが何度もあった。しかし、友達のおかげで救われた。励ましてくれ、今まで通りに接してくれた。一緒に笑い、たくさんのかたを一緒にやることで、つらいことを忘れさせてくれた。

姉のことは一日も忘れたことはない。その笑顔、会話が次から次へと浮かんでくる。見つからないことで悲しんでいる母親を見ることがつらかった。僕は生きていると信じていた。信じていなかった。

震災から数カ月後、1本の電話がなった。姉が見つかったという内容だった。DNA鑑定の結果、一致したという。「ようやく見つかったんだから、納得はいかないと思うけど、姉ちゃん

は家に帰ってくることを望んでいたのだし、お帰りと言ってあげよう」と父は言った。姉は無事で帰ってきた。僕は涙をこらえて「お帰り」と言って迎えた。

あの日、多くの命が一瞬のうちに失われた。今も多くの人の行方が分からない。ニュースで震災のことを聞くと、つらく悲しくなる。震災さえなかったら、津波さえなかったらと思うことも多い。

僕はこの震災で命のはかなさを思い知らされた。あつという間に命が失われることも知った。心が引き裂かれるような絶望感にも襲われた。しかし、だからこそ、「生きる」ということの大切さが分かった。命の尊さを実感することができた。

今は、大好きな姉の分まで精いっぱい生きたいと考えている。「僕はがんばっているよ」といつでも姉に自信を持って言える自分でありたいと思う。僕を支えてくれたすべての人のために、家族のために、何より姉のために、僕は前をしっかりと見て、一步一步着実に歩いていきたいと思う。生きていくことに感謝しながら。

「やまだの作文」第40集

油断と過信があった

【豊間根・荒川】

2

内田 明（64歳）

私は、昭和24年に東京都練馬区で生まれた。小さいころから生き物を育てるのが好きで、海への憧れもあり、東京水産大学増殖学科に進んだ。

入学してから大学紛争が激化し、大学が閉鎖されたりする中、私は友人2人と連れ立って沖縄に貝の採集旅行に出かけた。当時沖縄はアメリカの施政下であり、入域の許可をもらって3万円を100ドルに替え、東京晴海ふ頭から出港した。

目的地は石垣島の川平湾^{かびら}。川平では、古民家1軒を借り切って長期滞在し、毎日海に潜り、海岸を散策して暮らした。

川平湾には外洋に通じる深いV字谷がある。現在は遊泳禁止だが、何も知らぬ私たちはそのV字谷で強い流れに引き込まれ、外洋に流されそうになった。何とか自力で助かったが、半鐘を鳴らす遭難騒ぎとなり、集落にいられなくなった。

石垣市に戻って民宿に収まると、することがない。友人の提案で山に登ることにした。石垣島には、沖縄で最も高い於茂登岳^{おもとだけ}（標高525・5メートル）がある。私たちは歩いて山に向かった。

道々、不思議な光景を目にした。巨大なサンゴの塊が山麓のあちらこちらにころがっているのだ。海岸にあるべきサンゴの塊が、なぜ山麓にあるのか、理由は分からない。山頂は開けていて小さな展望台があり、360度のパノラマが素晴らしかった。

石垣市に帰って、山麓に散らばるサンゴの塊のことを聞くと、江戸時代の「明和の大津波」によって打ち上げられた物だという。高さ80メートルの大津波が、東から来て西に抜けていったのだそうだ。サンゴの塊は高さ80メートルの大津波として、私の脳裏に焼き付いた。

昭和51年10月、私は山田町の水産専門職員に採用され、定年まで水産一筋で働いた。

昭和53年5月27日に結婚し、新婚旅行から帰ってすぐの6月12日の夕方、宮城県沖地震に遭遇した。津波警報が鳴り響く中、私は新妻を連れて高台に避難し、三陸海岸の恐ろしさを実感した。「安全な場所に住もう」と、私たちは土地探しを始め、豊間根に目を付けた。地価は安く、津波は届かず、国道45号が寸断されても、盛岡に通じる近道がある。昭和57年暮れ、私たちは豊間根に移り住んだ。

それから28年後、巨大津波が三陸海岸を襲った。

3月11日、私は三陸やまだ漁協の嘱託職員として、山田漁連魚市場の2階で働いているはずだった。しかし、長男が青森市から盛岡市に引っ越す日に決めたため、午後には妻と2人で盛岡に手伝いに行かねばならない。漁協を休み、午前中だけ、4月から働くことになっていた町立鯨と海の科学館でアルバイトをしていた。

正午で切り上げ、町の保健センターで働いていた妻と合流し、自宅に戻って昼食を取った。午後2時ごろ出発し、津軽石回りで国道106号に出て、茂市を過ぎた辺りで携帯電話が緊急地震速報を受信した。私たちは、孫を迎えに盛岡へ走らねばならない。

3月15日、私は山田に戻り、娘が働く豊間根保育園で娘と再会した。豊間根の町並みは普段と変わりないが、保育園と、隣接する生活改善センターは避難所になり、自宅近くの健康増進センター体育館が遺体安置所になっていた。体育館の玄関に張り出された収容遺体の名簿には、職場の同僚をはじめ、多くの知人の名前が並んでいた。私は中に入れてもらい、同僚の遺体に手を合わせた。遺体安置所には、家族を探す人が引きも切らず訪れていた。

私は4月から無職になり、役場に頼まれて5月から8月まで豊間根中学校避難所の運営責任者を務めた。被災者は皆、生きること懸命で、家を流されたことや、家族を失ったことを自ら話す人はいなかった。

避難所には、和歌山県、高知県、沖縄県、兵庫県など、多くの自治体から支援の職員が入れ替わり、立ち替わり来た。彼らは支援するだけでなく、津波の被害や避難所の運営を体験するために来ている。私は彼らに、努めて津波談義をした。

21世紀の今日、先進国と言われる日本で、なぜこれほどの津波被害が出たのか。「大した津波は来ない」と高をくくったの油断、防潮堤の過信が原因であるに違いない。住民のみならず、住民を支えるべき役場、消防署、病院さえ被災した。多くの防潮堤が、基礎から倒壊した。戦国時

代なら落城ではないか。

私たちは、「高台に逃げる」「高台に住む」の津波対応の原点に立ち返り、自分と家族の命を守らなければならない。国・県・市町村には、沿岸のどこにいても3・11大津波の到達点が視界に入るよう、各所に表示してもらいたい。合わせて、国には早急に、沖合で検知した津波波高を国民に確実に速報するシステムを構築してもらいたい。

津波の力は強大であるが、地震と異なり、私たちに逃げる数分間の余裕を与えてくれる。その数分間を無駄にするなど、陸前高田市の県立病院4階病室でカーテンにつかまり、かろうじて助かった津波研究者が言っている。その人はすでに亡くなったが、『津波でんこん』という名著を残してくれた。地震国日本に住む人必読の書である。あなたは読みましたか？

後方支援に徹して

【豊間根・荒川】

3

荒川婦人会長・荒川婦人防火クラブ会長・町議会議員 きつかわ 吉川 淑子（70歳）

3・11は山田町定例議会の最終日であった。議会再開が午後3時なので、15分前に議場に入ろうとした矢先、大地震が起きたのだ。議場がう階なので揺れがものすごく、立っていることも困難で、その場を離れることもできず、誰もが右往左往した。いつまでも続く揺れに、このまま庁

舎も崩壊し、「私はこれで終わりかもしれない」と恐怖を感じた。その後、何とか1階に下り、役場駐車場の車の前に来た時、目を疑った。ドドーン、ドドドーンと今まで聞いたこともない轟音を上げ、大津波が襲って来たのだった。

あちこちにベージュ色の煙が山のように大きく立ち上り、まっすぐ立っているべき電柱が、こんなにやくのようにグニャグニャと激しく揺れ動く不思議な光景。家々がゴシャゴシャと木の葉のように流れ、たちまち足元まで押し寄せて来た。「これはテレビのスローモーションか」。紙芝居を見ているようでもあり、錯覚だと思った。逃げ惑い、ようやく避難して来た人たちは「また、大津波が襲ってくるかもしれない」と言い、さらに高台を目指して移動を始めた。

私は八幡神社の境内まで皆と一緒に上がって行った。大勢の中にはけがをしていたり、ずぶ濡れだったりする人もいた。やがて地震が収まり、黒い水が引いていった。もはや誰も声を出す人もなく、辺り一面、シーンと奇妙な静けさに包まれた。それもつかの間、今度はバーン、バーンと爆発音上がり、そこからポツ、ポツと炎が立ち上り大きくなっていった。やがて戦場のような様子に変わっていった。車が家に取り上げたりひっくり返ったり、数多くの車のクラクションがビイー、ビイーと異常を知らせるかのように、切なくいつまでも鳴り響いていた。

下の方から男の人たちが何か毛布にくるみ、重そうに運んで来る。「何だろうか?」。毛布の中がチラッと目に入った。それは痛ましく恐ろしい現実だった。私は両手を合わせ、ただ祈るだけだった。やがて暗くなり、寒さが襲って来た。女性たちはトイレに困り、その都度、私は携帯電話

話の明かりで案内した。紙は詰まるから流さぬよう注意し、皆が協力し合った。

その間も周りはどんどん火が広がり、熱さも感じるようになってきた。じわじわと駐車場にも迫ってくる。「車に引火したら危険だ」と言われ、慌てて公民館の方へ車を移動させた。夜中になり、皆、中央公民館に集まるよう伝えられた。中央公民館は入り切れないほどの人でぎっしりだった。千人以上はいたであろうか。皆、寒さと恐怖で震えていた。コンクリートの上にずっと立っていることもできず、うずくまる人、疲れ切って横たわる人もいた。

午前0時過ぎ、外は見渡す限り全て真っ赤になっている。「どうなるのだろうか……」。不安で皆身を寄せ合っている。刻々と時は過ぎていく、これだけ大勢の人がいるのにおしゃべりをする人もなく、シーンと静まり返り、深刻になっていた。

そんな中、私の隣にいた若い女の人がつぶやいた。「私たち、これからもう何も食べることができなくなるんだね……」。私は「そんなことないですよ。荒川婦人防火クラブの人たちが、今ごろ寝ずに炊き出しをしているはずですよ。明日は食べられますよ。間違いないから大丈夫」と言った。それを聞いていた周りの人たちの厳しかった顔が少し緩み、ちょっと安心したかのように見えたので、私はいくらか救われる思いがした。

午前2時ごろ、「車が通れる道ができました。ここから豊間根方面に向かってください。バスも来ますが、車のある人は先になるべく子供や弱者を乗せて行ってください」と役場の人が言った。「さあ脱出だ」。私は急いで自分の車に飛び乗り、「誰か乗ってください。3人乗れまーす」

と叫んだ。小さな子供の手を引いたおばあさんと、赤ちゃんを抱いた若いお母さんの4人が後部座席に乗り込んだ。前の席にもう1人乗れる。「あと1人乗れます。誰かー」。外には暗闇の中、公民館の入り口の前に大勢の人が立って、皆こちらを見ている。その中から1人、杖をついたおばあさんが皆に促されて出てきた。よし出発だ。「お先にすみません」と叫びながらアクセルを踏んだ。膝がガクガクする。背を丸め目を凝らし、真っ暗な山道を豊間根目指して運転した。やっと、避難所の豊間根小学校にたどり着いた。

だが、私たちが先着らしく避難所はまだ開いていない。小さな子のおばあさんと若いお母さんに、「避難所に置いていかれたら凍えてしまいます。親戚の家がありますから、そこまで送ってください。何とかお願いします」と懇願され、4人を送って行った。88歳というもう1人のおばあさんは、そのまま私の家まで連れて帰り、ものすごく寒いのですぐ私のベッドへ入れ、さらに毛布を何枚も掛けてあげた。

安堵してわれに返った時は朝3時を過ぎていた。4時過ぎになり、荒川農業構造改善センターに行った。センターでは私が信じていた通り、炊き出しをしていた。婦人会の人たちはもちろんのこと、地域の皆さん、学校の校長先生まで皆協力し、必死で支援してくれていた。

その後、避難所に炊き出しを届けてから、被災された方たちの中に入って行き、「今、何が一番必要ですか」と聞いて回った。その惨状を私は黙って見過ごすことはできなかった。一刻の猶予もないその大変な事態を皆に知らせ、独断であったが、荒川地区全戸に支援物資をお願いし、

出してもらうことを決断した。各班長に物資を集めてくれるよう依頼した。皆、ガソリンもない中、家々を回り、頑張って多くの物資を集めて協力してくれた。どこの家でも快く提供してくださったとのことで、本当にありがたかった。

何日も家に帰らず、情報収集をし、避難路を確保した役場職員の方々、お互いに励まし合った避難所の皆様、炊き出し支援などで命をつないでくれた多くの方々、すべての人に感謝したい。

「明日へ向かって」第1集

感謝の心を子や孫に

【豊間根・荒川】

4

尾形マサ子（68歳）

私の住まいは静かな農村地帯にあり、農家の仲間20人で、小さいながら産直の店舗を営んでいます。

東日本大震災では津波を免れましたが、大きな揺れ、寒さと恐怖で誰もが震えておりました。その時から豊間根地区は、大津波と大火事で山田から避難して来た人たちでいっぱいになりました。

役場支所前の広場には自衛隊や消防車のほか、大勢の人たち——はだしの人、足に包帯を巻

き、木の枝をつえにしている人、愛犬と逃れて行き場のない人、一斗缶でまきをたく人たち、身内の安否を確認する人など——が集まって来ていました。支所の窓口は人手不足で対応し切れず、パニック状態でした。私たち新田地区の農業集会所でも被災者を受け入れ、父ちゃん、母ちゃん、誰もが協力し行動しました。

豊間根小学校にも避難者があふれ、先生方も対応に大変なので、同じ地区の者として少しでも手伝おうと何回も通いました。私たちは、心から支援しなければという気持ちでいっぱいでした。私は内陸生まれで津波の恐ろしさ、怖さを半分も知らず、炊き出しに支援活動に無我夢中になっていました。

時が過ぎていくうちに、人づてに様々な消息を聞き、大変つらいことばかりでした。「シーサイドかる」（介護老人保健施設）にいた義母をはじめ、とても大切な身内の人たちが犠牲となっていました。

家を失くした親戚、店や職を失った兄弟、そして津波にのまれた、お世話になった友人、義母の介護をお願いした方、施設職員の方々、産直で出会ったお客様……。どうしようもなく悲しい思いが今も駆け巡ります。お客様や友達を励まそうとして、反対に私の方が励まされ、元気を頂くこともあります。私は当たり前の事をしたのですが、今でも「あの時は、ありがたがったあがすう」と声を掛けられ、お礼を言ってくれる方がいます。私の方が感謝でいっぱいです。

遠くからわざわざ心配して来てくれた知人、全国、世界各国の皆様からも支援していただき、

とてもありがたく思っております。これから食料、生活必需品の大切さ、皆様から頂いたご恩、感謝の心を忘れることのないよう、子や孫たちへ伝えていきたいと思っております。

「明日へ向かって」第2集

「結いの精神」あつてこそ

【豊間根・荒川】

5

荒川婦人防火クラブ副会長 齊藤順子（58歳）

あの日は、豊間根の会社の事務室でいつもと変わりなくパソコンに向かっていた。午後2時46分、携帯電話からの警告音。「何だろう?」。ミシミシ、グラグラ、ドドドドと今まで経験したことのない、あまりにも不気味で異様な揺れ。「地震だ!」。収まったと思うと、またグラグラと何度も繰り返す。電気も電話も不通になり、慌てて車のテレビのスイッチを入れた。

その映像は、宮古の魚市場や「シートピアなあと」付近に津波が押し寄せて、車やコンテナがブカブカと浮いて流されている、信じられないような光景を映し出していた。「まさか!」。山田の現場から帰って来た従業員は「家も車も電柱も流され大変だ。自分の家も流された。この世の事とは思えない」と話してくれた。

余震が続く中、消防団から「支所に来てほしい」と団員が迎えに来た。急いで役場の豊間根支

所に向かった。本部、各分団も集まっていた。「津波の被害で山田が壊滅状態だ。豊間根全域で炊き出しをしてほしい」との要請であった。荒川地区には全戸加入の自主防災組織「荒川婦人防火クラブ」がある。何度となく炊き出しの訓練もあり、経験済みであったので何のためらいもなく引き受けた。

さっそくその準備で事務所に戻った。ライフラインがすべて切断されていたので地区の人たちへの連絡は足で歩くしかなかった。道を通る人に声を掛け、炊き出しの伝言を頼んだ。従業員も発電機、灯光機、ガソリン、灯油、石油ストーブ、お米などを荒川農業構造改善センターまで運び、取り付けてくれた。このころはもう薄暗くなって雪もちらつき、とても寒かった。

いち早く駆けつけてくれた前会長は米、梅干し、漬物、炊き出しに必要な材料を持参して足早に入ってきた。一人、二人、三人と地域の人が40人も集まってきた。皆「他に必要な物があれば持ってくるよ」と声を掛けてくれ、足りない物は持ち寄った。炊き出しは暗闇の中、発電機の電灯を頼りに作業を分担し、米とぎからおにぎりが出来るまでを何度も繰り返し続けた。

作業中におにぎりを取りに来た、役場の職員が「山田の街中が大火事になり、行方不明者も多数いるようだ。亡くなった人も運ばれている。中学校の体育館には五、六百人の人が避難している。まだまだ増えるだろう」と語っていた。その話を聞き、おにぎりはまだまだ足りない、できるだけ作って早く温かいうちに食べさせてあげたい。炊き出しに携わった誰もがそう思うのだった。

5升炊きの釜5台をフル回転させ、2926個を作り終えた時、夜中の1時を回っていた。少し休憩し、早朝4時から始めることにして、いったん解散した。

寒さと暗闇の中、連絡の取れない親、兄弟、親戚、知人の安否が心配で身体が震えていた。他の人も同じだったと思う。

3時半、五つの釜のスイッチを入れた。50人くらいで作業をした。何度か繰り返していると、ガス釜の不具合が出てきて思うようにはかどらない。ここの釜だけでは足りず、各地区でガス釜がある人にご飯を炊いて持参してもらおうよう頼んだ。「分かった」と皆が快く引き受けてくれた。セクターに来られない人も炊き上がれば運んでくれて、スムーズにおにぎりが作れた。

炊き出しの合間に会長と各避難所に行き、「今何が必要ですか？」と要望を聞いて回り、必要な物を各地区へお願いして、毛布やタオル、衣類、新しい下着、歯ブラシなど日用品を届けた。街の中心地は黒く焼けたがれきの山で、写真で見た戦場のような光景でもとも衝撃的だった。また、薄暗い中、煙と火事の臭いが漂っていた。甚大な被害はこの山田町だけではなく、東日本の広範囲であることが分かり、怖さが増してきた。

3日目、米も残り少なくなっていた。電気の不通で精米できず、家々から米を調達するのも限界に来ていた。モミはあってもどうすることもできなかった。残り少ない米を心配した区長さんたちが、大型の発電機と精米機を探してきて精米してくれたので、どうにか炊き出しに支障を来さず続けることができた。

この炊き出しは4月8日まで毎日続き、物資の調達、運搬配給は4月29日まで続いた。これも普段からの人と人との交わり、人情ある「結いの精神」が当たり前に根付いている地域、荒川だからできた成果だと思う。本当に「協力」のありがたさが身に染みる日々だった。

「明日へ向かって」第1集

炊き出しに熱い思いを込めて

【豊間根・荒川】

6

佐々木マサ子（62歳）

自宅で地震に遭った後、私はすぐ、食生活改善推進員としての自覚から炊き出しの指示を仰ぐと豊間根生活改善センターに向かいました。しかし、そこは人であふれていて、指示を待つどころではないと気付き、地区の上豊間根自治交流会館に急行、炊き出しボランティアの活動を始めました。

翌々日、自治交流会館では、津波と火災に追われ、中央コミュニティセンターから平安荘（特別養護老人ホーム）へと移動して来た、在宅の寝たきり高齢者と付き添い家族45人、大沢のグループホーム入居者とスタッフ22人を受け入れることになりました。地域から衣類や寝具が続々と集まり、会館内は座布団が敷き詰められて、寝たきりの人や車いすの人を休ませる避難所とな

りました。

炊き出し用の米は家々で持ち寄り、宝珠院（曹洞宗寺院）や豊間根小学校からも備蓄米や収穫米がたくさん集まって、おにぎりの炊き出しを開始しました。日増しに災害対策本部の豊間根支部から要請される個数も増え、地区の大勢の協力と、5升炊きの大釜2台がフル回転したおかげで、一気に300個のおにぎりができました。

500個や千個の要請にも対応できるようになるまでには、そう時間がかからず、協力人数の調整や、仕事の役割分担などを工夫しながら進めました。被災した人たちに、一つでも多く温かい物を届けてあげたいという強い思いからでした。

当時、自治交流会館の役割は三つありました。災対本部豊間根支部が要請した数のおにぎりを作り届ける▽宿泊者の食事作り▽近くの民家を借りたグループホームの人に食事を届ける——ことでした。当初はおにぎりと言物だけでしたが、温かい汁物やさやかな副食も添えて届けられるようになり、胸をなで下ろしました。

宿泊の高齢者の中には専門医療を要し、救急車で運ばれる人も出てきて、大変心配しました。避難者の健康管理を不眠不休でしてくれた保健師や社会福祉士さん、遠方から駆けつけてくれた看護師さん、ヘルパーさんたちが皆の健康を案じていました。衛生面の配慮から、私たち炊き出しの者は入室できず、励ましの言葉を掛けてやると思うようにできませんでした。

1週間後、物資も徐々に増え、飲料水から缶詰、乾物類、生野菜等が配給となり、炊き出しを

する者も大喜びでした。限られた食材でどんな献立ができるのか、皆で工夫し、不足の材料を家から持ち寄って作った料理を喜んでもらえた時は、疲れも吹き飛ぶ思いでした。中でも、大量に届いたイワナやサンマなどを日持ちするように工夫し、みりん干しをたくさん作ったことが印象深いです。自治交流会館に避難していた高齢者が他の施設に入所したり、自宅に戻ったり、グループホームの皆さんも職員が自力で炊事できるようになったため、4月12日で会館の炊き出しは終了しました。

作ったおにぎりの数は2万2千個。この炊き出しを支えた老若男女は約100人にのぼり、被災者を助けたいという熱い思いの大結集となったのです。私はこのボランティア体験から、仮設住宅を回り、話し相手となる傾聴ボランティアを始め、現在も活動中です。

「明日へ向かって」第2集

住民と避難者が一丸となつて

【豊間根・荒川】

7

根光子（60歳）

東日本大震災の津波と火事で山田の街は壊滅状態になり、間もなく豊間根・荒川の全域で炊き出しが始まりました。八千代地区の炊き出し場所は、豊間根生活改善センターでした。そこは消

防車両や大勢の人たちで騒然としていました。地震直後、安否確認に回り、その時点で八千代地区は特に異常がなかったのも、おにぎりの炊き出し要請に、すぐ地区の人たちを招集できました。最初の米は八千代地区で用意しましたが、次からの米は豊間根の農家の人たちから届いたものです。おにぎりは分量を心配することなく作り続けられました。皆が集まって炊き出しが始まると、おにぎりは順調に出来上がり、セーターには、他の地区からのおにぎりも集まっていました。その間も豊間根の保育園や小中学校、集会所は避難所になり、大勢の人が避難して来ました。役場の人たちは対応に忙しく、おにぎりの受け入れと配達も人手が足りず、十分機能できる状態ではありませんでした。皆、必死だったので、協力している地域の人たちのいら立ちは大声になり、セーター内は右往左往で、冷静さを欠く場面も多くありました。男の人たちは、足りない物の調達や物資搬入の手伝いなどのほか、炊き出しの場所を発電機で明るくしたり、避難所で稼働する数台の発電機の燃料補給のために寝ずの番をしてくれたり、地区一丸となって協力しました。

炊き出し作業も日付が変わり、大きな余震が襲う中、緊張と不安で疲れも見えてきたので、みんなはいったん帰ることにしました。翌朝の作業では、支援の食材で温かい物もでき、おにぎりは夜まで作り続けました。翌日からは勝山地区と作業を交代し、支援体制のサイクルもできました。おにぎり作りには、避難して来た人たちも一緒に参加していました。この事実はずいぶん伝えていきたいです。

「明日へ向かって」第2集

非常時の初動態勢をしつかりと

【豊間根・荒川】

8

荒川婦人防火クラブ副会長 芳賀恵美子（57歳）

宮古市の特別養護老人ホームでの勤務を終え、買い物をして自宅に着き、間もなくのことだった。体験したことのない大きな揺れに驚いて家を飛び出し、地面の揺れと地響きに立っていられずに座り込んだ。やんだと思いきや許すと、また大きな揺れと、物置小屋からガラガラと資材の崩れ落ちる大きな音がした。恐怖と不安を感じる中、またさらに大きな余震。停電で情報の寸断が起きた。

直ちに防災行政無線が繰り返し緊急放送を流す。「近所の方々と誘い合って避難してください。津波が来ます」。身内が心配になり、確認しに行った。そこで「シートピアなど」（宮古市の観光施設）が津波にのまれるのをテレビの映像で見た時、私たち荒川婦人防火クラブの災害時の役割である炊き出し、救援活動をすぐにしなければならないと思った。情報手段が寸断されているので、連絡を待っていても来ないと考え、炊き出しの作業をする荒川農業構造改善センターへ駆けつけた。

しかし、鍵が開いていない。急いで借りに行くと「消防団の第13分団が借りて行った」と言われ、こんなときは管理者自身がいち早く開けておくべきだと、役割分担の必要性を感じながらセンターへ戻ったが、まだ誰も来ていない。いつもは防火クラブの会長の指揮のもとで行動したので、どうすれば良いのか迷ってしまった。

まずは自分の地区だけでも自分が責任を持たねばと考え、地区長宅へ行き、炊き出しの動員でセンターへ集合してもらうことの連絡をお願いし、戻った。各地区から徐々に集まってきた人たちと相談しながら炊き出しを行い、今までの訓練の成果もあり、手際よく協力的に進んだ。作業は深夜まで続いた。その時、防火クラブの会長（吉川淑子さん）は山田にいてまだ帰っていないことが分かった。「会長は無事だろうか。私の職場はどうなっているだろうか」と心配だった。

炊き出しが終わったのは深夜の1時を過ぎていたが、勤め先が心配だったので、1人で車に乗り、山道を回って闇夜の中、宮古へ向かった。職場では非常時のために、ある程度の救援物資（米）は備蓄してあるのだが、職員の分はない。翌朝には職員たちの食料を作り、職場に持って行った。

このことで、支援する側に対しての配慮も大事だと気がついた。幸い荒川地区は農業地帯なので、何とか米は集められ、精米機や発電機を常備してくれた方々の協力で、しのぐことができた。今回の大震災で、災害時の初動態勢をしつかりするために、救援物資が届くまでに必要な物資の常備の仕方や分量、保管のあり方、避難所や炊き出し場所の管理体制を日頃から具体的に検討

し、整備しておくことが重要だと感じた。

「明日へ向かって」第1集

おにぎり作り続けた1カ月

【豊間根・荒川】

7

三ヶ尻ミツ子（63歳）

恐怖の大地震の時、仕事で車の中にいました。異様な地響きと同時に、大型車がシーソーに乗っているように前後にバウンドし、激しい揺れは長く続きました。強い余震の合間に急いで家に戻ると、山田から帰って来た夫は、家から米を持ち出し「炊き出しをするように」と指示をして、また山田へ向かいました。

桜野地区の「農村婦人の家」に私たちミセスクラブ員は集合し、材料等を準備して夜明けを待って炊き出しを開始。地域の方々の協力も得て、次の日からは30人くらいで、毎日早朝から夜まで1カ月あまりおにぎりを作り続けました。道路が寸断、ライフラインが全面ストップ、3日もすると物不足は深刻になって、賞味期限の日付も気にしなくなりました。

私の息子は、車がなく買い物ができない山間集落のお年寄りたちのためにろうそくや乾電池などを調達し、移動販売車で届け続けました。燃料も制限され、移動販売車の軽油は建設会社から

譲ってもらい、支援に使う車のガソリンは3時間以上も並び、何とか10リットル給油できました。付近に農家は少なく、お米が底をついた時は苦労しました。3軒の農家から集めたモミを精米できるまでの間、皆に協力を呼び掛けて米を出してもらいました。

「婦人の家」の前の広場には、警察車両が10台、20台と集まって来て、次の日からは他県の車両も来るようになり、救援活動の拠点になりました。健康増進センター（体育館）は遺体安置所に指定されましたが、後に手狭になり、隣の公園も使うようになりました。警察の人たちは、小雪が降り窓が凍っている車の中で仮眠していて、捜索活動に出かけた後に、ダンボール箱に入った小さな凍ったおにぎりが届けられていたので、温めておくようにしました。休む所は約50人の方にはホールを、遠く九州や福井県から来ている検視官の方たちには、私たちの作業終了後の部屋を使用してもらうことにしました。

支援米も届くようになり、警察官、体育館で確認作業をしている人たちにも安心して分けてあげることができました。私たちが炊き出しをしている目の前の体育館には、連日何体もの遺体が運ばれてきました。身内を必死に捜し回る人たちも日増しに多くなり、余りにも犠牲者が多いため、県内で火葬できず「県外まで行ってくる」と言っていました。その場にいる人たちに掛ける言葉が見つからず、声が詰まり、一礼をして炊き出しに通り続けました。

検視官と机を借りに行った役場豊間根支所の前も、体育館とその周辺も、「これが現実なのか」と目を疑いたくなるような惨状でした。あらためて震災当初を顧みると、大槌から山を越えて歩

いて来た2人の男の子や、濡れて息子に服を借りに来た消防団員、居場所を求めて来た知人たち、私の留守中に訪ねて来た人たちに、何もしてあげることができなかったことが悔やまれます。合掌し、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。強靱な山田の復興と、仮設住宅で暮らしている方々が一日でも早く元の生活に戻るように、私たち桜野地区ミセスクラブは祈っております。

「明日へ向かって」第2集